日米聾学生短歌・俳句交流 2005

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター[1)]　同　産業技術学部[2)]

細谷美代子[1)]　松藤みどり[1)]　今井計[2)]

要旨：筑波技術短期大学と米国ナショナル聾工科大学は 2004 年から 2005 年にかけて、短歌・俳句をキーワードとした 3 回目の文学的国際交流「日米聾学生短歌・俳句交流 2005」を実施した。この国際交流プロジェクトは PEN から資金提供を受け、学生親善大使を相互に派遣し、両校学生の友好親善・国際交流・異文化理解に資する大きな成果を挙げることができた。同時に、筑波技術短期大学として初めて姉妹校学生を公式に迎え入れたという点でも記念すべき活動であった。本稿はこのプロジェクトの概要を報告し、あわせて国際交流活動に伴う課題を指摘する。

キーワード：短歌・俳句・国際交流・学生親善大使

1. はじめに

筑波技術短期大学[1)]と米国ナショナル聾工科大学（National Technical Institute for the Deaf、以下 NTID）との文学的国際交流は 2001 年以来の継続的活動で PEN インターナショナル（Postsecondary Education Network International、以下 PEN）の支援を受けてきた。

2004 年夏、3 度目の「日米聾学生俳句コンテスト」[2)]の企画がもちあがった。双方で検討の結果、①俳句に限定することなく、「短歌・俳句」をキーワードとする国際交流活動とする、②両校のコンテスト入賞者・交流参加者は学生親善大使として相互訪問するという 2 点を骨子とするプロジェクトが決まった。訪問の時期は両校の学年暦等を勘案し、2005 年 3 月に短大学生が NTID を、5 月末に NTID 学生が短大を訪問することとなった。本稿はこの「短歌・俳句」をキーワードとするユニークな文学的国際交流の実際を報告し、今後の課題を提示するものである。[3)]

2. 筑波技術短期大学親善大使の NTID 訪問

2.1 募集日程

04 年夏から日米間で協議した内容に基づきプロジェクトの親善大使募集活動は以下のような日程で行われた。

04 年	11 月中	応募資格・選考手順の検討
		募集要項作成
	12 月　1 日	募集予告ポスター掲示
	12 月　6 日	募集要項配布（1・2 年全員）
		募集ポスター掲示
05 年	1 月　7 日	再度募集ポスターを掲示
	1 月　12 日	締め切り（応募者 1 名）
	1 月　13 日	再募集要項配布
	1 月　21 日	再募集締め切り（応募者 8 名）
		面接日程作成及び通知
	1 月　25 日	面接及び選考結果通知

募集対象は 1・2 年生とし、応募に当たっては親善大使としての抱負を述べた作文と自作短歌 3 首の提出を求めた。冬休みを挟んだ約 1 ヶ月の募集期間は、帰省した折に家族と話し合ったうえでの応募を期待したものであった。しかし、年が明け授業が始まっても学生の反応は鈍い。急遽「募集中」ポスターを掲示し、注意喚起に努めたものの、締め切り時点の応募は募集人数に達しなかった。そこで、方針を変更し卒業予定者の応募を認めることにし、全学生を対象に再募集をかけた。1 月 21 日の第 2 次締め切りには 8 名の応募を得た。書類審査・面接を経て 5 名の親善大使候補を決め即日応募者全員に選考結果を通知し、約 2 ヶ月にわたる募集活動は終了した。応募が低調であったことの理由としては、短歌作品提出という条件があったこと、同時期に他の海外交流計画の募集があったことなどが考えられる。

親善大使は小吉麻伊を代表とする以下の 5 名（学年は 2004 年度）である。

大谷津和之（電子情報学科情報工学専攻 3 年）
大澤　直子（デザイン学科 2 年）
星野　陽子（電子情報学科情報工学専攻 2 年）
小吉　麻伊（電子情報学科電子工学専攻 1 年）
石井　孝明（電子情報学科情報工学専攻 1 年）

同行教員（所属部局名は当時のもの）・通訳者は以下の通りである。
細谷美代子（障害者高等教育センター）

松藤みどり（障害者高等教育センター）
今井　　計（聴覚部建築工学科）
磯田　恭子（手話通訳）

2.2　準備

NTID 側は明確に 04 年の「コンテスト入賞者」を親善大使の条件としていたが、筑波技術短期大学では短歌創作を応募要件の一部とするものの、親善大使としての資質を重視して選考が行われた。

しかしながら、親善大使の重要な職務の一つが自作短歌をパフォーマンスによって NTID の学生・教職員に紹介することである以上、一人ひとりが誇りをもって披露できる作品を携えて訪米しなければならない。親善大使候補決定後は指導担当教員と学生との間で推敲を重ねた。自作に対する最高の理解者であると同時に最高のパフォーマンス表現者であること、さらに他のメンバーの作品に対しても深い理解を持つことなどが要求されたのである。

“僕らしさ”表す古着今日はこれ！胸張り冬の街を歩もう（大谷津和之）
小春日和雲にさそわれ部屋を出たかすかな風が優しく触れる（大澤直子）
英語チャット友のからかい汗にじみ我が指の動き速まるを見る（星野陽子）
指先を静かに操り奏でるは音無き世界の音無き調べ（小吉麻伊）
聞こえない同じ立場でいる家族音は無くとも言葉飛び交う（石井孝明）

2.3　訪米

3 月 6 日成田出発、同 14 日成田帰着というスケジュールで、その詳細は表 1 に示す通りである。NTID についての情報はこれまでにも報告があるので本稿では触れない。

現地時間の日曜夕方着、翌週日曜帰国というスケジュールのおかげで、月曜から金曜まで丸一週間キャンパスで過ごすことができ、授業参加・参観の機会も過去数次の訪米団より格段に多く設定された。地元のロチェスター聾学校を訪問する機会を得られたのも幸いであった。

今回の親善大使の最大の任務はめいめいの短歌作品を手話パフォーマンスで発表することである。発表に先立ち、NTID の Aaron Kelstone 、Ethan Sinnott ら専門家の指導を受けるという貴重な機会を与えられた。さらに、PEN の HP 掲載用にスタジオでのビデオ撮りを経て発表会に臨んだ。日本の親善大使はパフォーマンス以外にソーラン節踊りも披露し喝采を浴びた。

こうしたプログラムの中で、プロジェクトの米国側メンバーである NTID 親善大使及び同行予定教員と顔合わせすることができたことも帰国後の歓迎準備に有益であった。

図 1　NTID の Hurwitz 学長と

図 2　パフォーマンスの指導

図 3　短大学生の発表の後

2.4　報告会

4 月 20 日、筑波技術短期大学において帰国報告会を開いた。報告会開催は親善大使としての責務であるとともに、まもなく迎えるNTIDの訪日団を迎える準備チームの結成を視野に入れたものでもあった。できるだけ多くの学生を集め、プロジェクトに関心を持ってもらうねらいから、過去の例を検討し改善を加えた。まず、これまでこの種の報告会では講堂を使っていたがこれを止め、講義室に変更した。発表者側と来場者の物理的距離を近づけるためである。また、飲み物などを用意して茶話会風に仕立て、和やかな雰囲気を演出した。学生はプレゼンテーション資料を入念に準備して報告会に臨んだ。1 年 2 年を中心に数十人の学生が集まるという成果のもと、5 月の訪日団受け入れチームの基礎ができた。

3. NTID 親善大使の筑波技術短期大学訪問

3.1　受け入れ準備及びスケジュール

帰国後直ちに報告会の準備を指導する一方で訪日団のスケジュール決めという重要な仕事にも取り組んだ。

先方の希望で俳句関連の史跡、施設訪問を中心に検討した。結局、東京深川を中心とする松尾芭蕉関連の史跡・施設、聾の俳人として知られる村上鬼城の群馬県高崎市にある記念館、東京渋谷での手話狂言鑑賞など、つくば市外へ遠出する日が多くなった。通訳等含め 10 数人の団体がスムースに行動するためには実地踏査を欠かせない。担当者が週末に下見をし、コースを検討し、関係先に挨拶するなどの事前準備にかなりの労力を要した。

一方、キャンパス内のスケジュールは全学的協力を得て、興味深く充実したスケジュールを組むことができた。全体スケジュールは以下の通りである。

5 月 23 日　午後　成田着
24 日　午前　学長表敬訪問・学内見学
午後　東京のＰＥＮ本部訪問
夜　手話狂言鑑賞・東京泊
25 日　午前　芭蕉関係史跡訪問
夜　日米学生の交流Ⅰ
（短大学生の発表を中心に）
26 日　午前　学内授業等視察
午後　視覚部見学・お茶会
27 日　終日　村上鬼城資料館訪問
28 日　午前　つくば市内散策
午後　日米学生の交流Ⅱ
（NTID 学生の発表を中心に）
夜　日米学生の交流Ⅲ
（さよならパーティー）
29 日　午前　筑波山神社を経て成田へ
午後　成田発

3.2　受け入れ態勢

今次の訪日団受け入れに当たっては、国際交流委員会の承認のもとに受け入れ WG を設けた。
メンバーは以下の通りである。所属部局名は当時のものである。

小林　庸浩（障害者高等教育研究センター）
細谷美代子
松藤みどり
今井　　計
萩田　秋雄（聴覚部建築工学科）
荒木　　勉（聴覚部機械工学科）
須藤　正彦（障害者高等教育研究センター）
加藤　伸子（聴覚部電子情報学科電子工学専攻）
白澤　麻弓（障害者高等教育研究センター）
河野　純大（聴覚部電子情報学科情報工学専攻）
青木　和子（障害者高等教育研究センター）
ホーリーマーティン・エドモンド
（障害者高等教育研究センター）
三浦　千代（研究協力係）
石濱　　均（学生係）

こうした WG の設定は 2005 年 2 月のデラサール大学セントベニルデカレジ（フィリピン）訪日団受け入れ以来 2 度目であるが、訪日団到着までに WG 会議は 5 月 18 日の一回だけにとどまるなど、機能的に動けなかった憾みがある。理由としては滞在中のスケジュール決めとメンバーの確定が遅れたこと等が挙げられる。WG の有効活用は今後の検討事項である。

学内の多くの人に関心を持ってもらうよう、広報にも努めた。食堂入り口に NTID 学生の作品を掲示する、学内 TV で行動予定を流す、アトリウムから見える位置にバナーを掲示するなどした。

3.3　NTID 訪日団

筑波技術短期大学とNTIDは姉妹校として永年の交流実績を持つものの、短大側が公式に NTID 学生および同行教職員を受け入れるのは今回が初めてであった。訪日団のメンバーは以下の通りである。学生については専攻・作品も併せて紹介しておく。

親善大使

Stepehen McDonald (Applied Optical Technology)

red sun
on the horizon
reflecting off
knolls of sand
my desire to drink

Jack Williams (Biomedical Photographic Communication)

straddling
the black swan
into the fog
on the river
of my dream

Christopher Zahniel (International Business)

autumn evening
blowing leaves
gather at the fence

Sam Sepah (Applied Arts and Science)

I learn it
before I give it
before I share it
I understand
my love for her

Jessica Thurber (Graphic Design)

writer's block...
the yawn that
never came

同行教員

Jerome Cushman
Aaron Kelstone
Ethan Sinnott
Luane Davis Haggerty

通訳

Deborah Makowski

図４　深川で芭蕉像とともに

図５　お茶会

図６　さよならパーティーで

4. 受け入れに関わる問題点及び改善点

今後改善を要する重要な問題点と改善の見られた点を以下に示す。

4.1 宿泊

ホテル宿泊を打診したが、PEN 本部は短期大学紫峰会館を指定し、訪日団は紫峰会館に泊まった。しかし、紫峰会館は外国からのゲストに泊まってもらうにははなはだ不都合な点の多い宿泊施設である。予想通りいくつかの問題があった。

問題点 1

館内には外線につながる電話がない。警備員室につながる内線電話のみ。今回は万一の連絡用にレンタル携帯電話を滞在中契約することで対応した。

問題点 2

玄関ドアが閉まっていると、外部から宿泊者に連絡することが難しい。

問題点 3

火災報知のみ警備員室に通報される。室内の非常通報装置を押しても館外には通じない。また、装置の復旧方法について学内者にも情報が乏しい。

問題点 4

室内のスイッチ類、備品の使い方の表示等が外国人宿泊者にわかりにくい。

問題点 5

バス・トイレ付きの部屋はツイン 1・シングル 4・和室 1 のみ。他にバス・トイレのない和室が 1。今回は男子学生 4 人が和室 2 室を使う形で収めたが、10 名以上の宿泊は難しい。今後の交流活動において男女比、学生と教員の比率等の条件によっては部屋割りに困難を生じることが予想される。

4.2 食事

宿泊問題に付随することであるが、短期大学内では通常は朝食を供する施設がない。紫峰会館にゲストが泊まると別途朝食の手配が必要である。昼食・夕食は学内食堂を利用した。このためスケジュールを食堂営業時間に合わせ、なおかつ混雑のピーク時を避けるなど難しい条件になった。また、ボリューム等を考え別メニューを依頼した。

4.3 会計

PEN 活動の一環としての国際交流活動等では活動に要する費用を関係者が立て替えている。フィリピンの訪日団を迎えた時から問題とされていたことであるが、関係者の立て替え払いがかなり高額になるということ、PEN 本部の精算が非常に遅いという二つの問題があった。今回は関係者の働きかけで、通訳費など一部の費用を事前に送金してもらうことができたが、最終精算までは相変わらずかなりの日数を要した。最終計算書を送ってから送金を受け取るまで 2 ヶ月以上を要した。抜本的な解決策が望まれる。

4.4 通訳・情報保障に関わる改善点

今次の交流によって従前からの問題点のうち改善の見られたものもある。それはこうした国際交流活動における通訳・情報保障態勢においてである。

従前は引率教員が手話通訳や音声日英通訳を務めていた。しかし、これでは学生は常に教員を通してしか情報を得ることができない、引率教員の負担が大きいなどの問題がかねて指摘されてきたところである。今回は、訪米・訪日のいずれにも手話通訳・音声通訳の予算を確保することができた。

4.4.1 訪米時

PEN 本部は引率教員と手話通訳合計 4 名が日本から同行することを認めた。また、滞米中の音声日英通訳については現地在住の日本人通訳 2 名を手配してくれた。こうした態勢は当然のことでありながら、従来は確保できなかったものであり、その意味では画期的なことであった。

4.4.2 受け入れ時

NTID からは音声英語と ASL 間の通訳専任者が同行してきた。しかし、受け入れにあたっては他に音声日英通訳・音声日本語と手話の通訳など複雑な対応が必要であり、そうした情報保障に PEN の予算措置がなされたことはこれもまた画期的なことであった。

5. むすび

国際交流活動は大学として鋭意取り組むべき優先課題である。また、教育という面から見ても学生に貴重な経験と刺激を与えうる機会でもある。しかし、交流活動を支える教員が授業の傍ら膨大な雑事を背負い込んでのプロジェクト遂行では長期的な展望は開けない。

本稿ではプロジェクトの実務面に焦点をあてて率直に問題点を指摘した。今後国際交流に関わる人たちがあらかじめ問題点を把握しておくことで、より実り多い交流活動が展開されるなら幸いである。

同時に改善の芽の存在も指摘した。この芽を育ててより有意義な、国際交流活動が実施されるよう願うものである。

注

1) 2005 年 10 月 1 日より筑波技術大学となった。本文における部局名はプロジェクト実施当時のものである。

2）2001 年春、NTID で「パナラ記念俳句コンテスト」が企画された。パナラとは、NTID 初の聾者教員としてまた詩人として、俳句をパフォーマンス授業に取り入れるなど、永年教育活動に貢献したロバート・F・パナラのことで、彼の八十寿を記念した企画であった。おりから PEN が発足したことでもあり、この企画は PEN 活動の一環として位置づけられ、NTID と筑波技術短期大学の共同事業「日米聾学生俳句コンテスト」が実施された。

2002 年には第 2 回ロバート・パナラ記念「日米聾学生俳句コンテスト」が実施されている。選者には鳴島甫筑波大学教授を迎え、入賞者による俳句パフォーマンスのビデオ映像は PEN の HP に掲載された。

3）「日米聾学生短歌・俳句交流 2005」に関わる写真・映像資料等は PEN の HP で見ることができる。以下の URL を参照されたい。

PEN の HP

http://www.pen.ntid.rit.edu

筑波技術短期大学生のパフォーマンス

http://www.pen.ntid.rit.edu/tcthaiku_2005.php

NTID 学生のパフォーマンス

http://www.pen.ntid.rit.edu/ntidhaiku_2005.php

参考文献

[1]細谷美代子：アメリカの聾高等教育と俳句ーナショナル聾工科大学の表現教育ー．月刊国語教育研究 358 号：54-59, 2002.

[2]Midori MATSUFUJI：Robert Panara Haiku Contest at NTID and TCT . TCT Education of Disabilities1(1)：1-7, 2002.

表 1　NTID でのスケジュール

Tsukuba College of Technology
Haiku/Tanka Contest Visit
6-13 March 2005

****6:30 RSE bus to airport**

	Sunday 6 March	Monday 7 March	Tuesday 8 March	Wednesday 9 March	Thursday 10 March	Friday 11 March	Saturday 12 March	Sunday 13 March
8:00			**Breakfast at hotel**	**Breakfast at hotel**	**Breakfast at hotel**	**Breakfast at hotel**		*****
8:30		Breakfast at hotel	8:45 Hotel shuttle to NTID	**8:15** RSE bus pickup			Breakfast at hotel	
9:00			NTID Tour		8:45 Hotel shuttle to NTID	8:45 Hotel shuttle to NTID		Depart NW 1732 (9:22 am)
9:30		Rest at hotel		Visit Rochester School for the Deaf			Depart for Niagara Falls	
10:00								
10:30					"Symbols & Themes" Class Aaron Weir			
11:00		Hotel shuttle to PEN-International		Lunch with RSD students		Special Interest area classes		
11:30								
12:00		Welcome Luncheon w/ PEN-International Team	Lunch		Lunch	Lunch	Lunch at Hard Rock Café	
12:30				Return to hotel				
1:00			NTID Classes	rest				
1:30		RIT campus Tour			Haiku videotaping	Special interest area classes		
2:00								
2:30				Hotel shuttle to NTID				
3:00				"Analyzing Literature" Class Luanne Davis	"Analyzing Literature" Class Luanne Davis			
3:30								
4:00		Hotel shuttle to hotel					Return to hotel	
4:30	Arrive ROC NW 3775 RSE bus to hotel	Rest at hotel						
5:00			Dinner at Dining Commons	Dinner at Dining Commons	Hotel shuttle to hotel		Dinner at hotel (box lunches will be in rooms)	
5:30					RSE bus to Marketplace Mall	Farewell reception		
6:00	Dinner at hotel	Dinner with NTID students Dining Commons	ASL class			Hosted by NTID Student Groups	6:15 RSE bus to downtown Rochester	
6:30	Relax at hotel	Dorm tour		**"Creative Sign Language" Workshop** Ethan Sinnot,	Dinner & shopping	LBJ 2590	"Stars On Ice" Skating Show (Olympic skaters)	
7:00				Aaron Weir Kellstone	Return to hotel at 9:00			
8:00								

Tanka/Haiku Exchange 2005

HOSOYA, Miyoko[1] MATSUFUJI, Midori[1] IMAI, Hajime[2]

[1] Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired, Tsukuba University of Technology

[2] Faculty of Industrial Technology, Tsukuba University of Technology

We report on one of the many activities of international exchange and understanding supported by PEN-International.

In March, 2005, students and faculty members from the Tsukuba College of Technology (TCT) visited the National Technical Institute for the Deaf (NTID), part of the Rochester Institute of Technology, and in May, TCT received students and faculty members from NTID.

This international exchange program between TCT and NTID, named "Tanka/Haiku Exchange 2005," was a literary and academic program.

In this article we report on our activities; our preparation activities, educational activities in the U.S.A., and the welcoming of Ambassadors of Goodwill from NTID. We also introduce their poems (Tanka/Haiku).

Key Words : Ambassadors of goodwill, Haiku, International exchange, Tanka